

実践ノート：まちかね保育園 p4c 「てつがくワーク」

桂ノ口 結衣

やってみたかったこと

大阪大学には、「自主運営」をルーツに持つ学内保育園がある。（文字にしてしまうと、どってことないけれど、すごいこと。）が、それは3つあるキャンパスのうちの、吹田キャンパスの話で、今回の舞台である豊中キャンパスの「まちかね保育園」は、2012年にできた、まだ新しい園。大学の研究協力機関としても位置づけられている。子らは、すくなくとも一人の保護者が、教員、職員、学生等、大学関係者。0歳児クラスから5歳児クラスまであり、今回協力していただいている4、5歳児クラスは、それぞれ在園児が6人、5人、と少人数であるため、合同でさまざまに活動している。園は、明るい三角形のホールを真ん中に据え、その天窗からの光も、周り三辺をぐるり囲む木でできた部屋も、あたたかい。園庭は乳児用と幼児用のふたつ。キャンパス内のさまざまな自然環境にも、よく散歩などに出かけている。登園時には、調理室から出汁のいい匂いがする。園の子ども達は、のびのびとして見える。わたしは、ここに開園当初から、自分史で言うなら学部生時代から、子を日中預かってもらっている、ひとりの保護者です。そのため、子らは、わたしを、「トクちゃんのお母さん」として、きっとほんのすこし知ってる。わたしも、ほとんどの子の顔と名前を知っていて、それぞれに対してすこし、印象もある。園のなかで、このお互いの「すこし」が、光や木と同じように、いつもわたしをあたためる。

そしてわたしは、保護者であるだけでなく、これまでいくつかの高校での「こどもの哲学」に関わってきた、哲学実践者の（孵化にやたらと時間のかかる）卵でもある。

「高校」以外にも出はじめた流れが、ある。2012年度末から、研究室 OG 哲学実践者・松川絵里さんが長年やってこられた、「元育児サークル」での母親を中心とした哲学カフェの進行役を時々挑戦させていただいたこと／2013年度に、生活綴り方に長年取り組んでこられた土佐いく子先生から、小学生たちとの関わりのお話をたくさん伺ったこと／2014年度から、指導教員であるほんまなおきさんと研究室 OG 哲学実践者・高橋綾さんが始められた、箕面多文化交流センターという「学校の外」での小学生との「こどもの哲学」に複数回参加させていただいたこと／2015年夏から、研究室の助教・稲原美苗さんと先輩の青木健太さんが取り組まれている、障害者歯科に通うお母さん達を対象とした哲学対話に継続的に参加させていただいたこと／2012年以降、自分が保育園の協力を得ながら初めて子育てをし始めたこと。

これらすべてが、自分が口にする「こどもの哲学」の「こども」を、なんだか居心地悪い言葉に変えていった。わたしにとっての、高校での活動を中心として呼んでいた「こども」が、結局のところ、「生徒」とほぼ同義の、なんとせまく小さい像であることか、が、もう自分で

よく見える。こどもは、地域の、すまいで、たとえば母とともに暮らし、あつというまに猛烈に変化する身体を動かし、遊び場では少々やんちゃもし、あるいは一人の時間を楽しみ、教育機関等にも身をおくことがある。わたしはずいぶんと長い間、なぜか熱心に、そのうちの「教育機関にも身をおく」の「部分のこども」の前にだけ現れ（たつもりでい）て、そして、だからこそ、そのほかの部分についてのその人の手触りが「教育機関にも身をおく」こどもから発される瞬間のあることを、驚いたり喜んだりしていたように思う。

それは、ちゃんと楽しいことであつたし、大切なことでもあると感じていた、けれど。けれど、もういちど0からの気持で、はじめから全部をひっくるめた、まるごとのこどもの哲学、を試してみたい、ってざわめいた。たぶん、やる何が何か大きく変わるわけではない、ただ、わたしが、もう異なっていた。「生徒」のなかに（あるいは先生のなかに、そしてもちろん自分のなかに）「こども」を見いだす、のではなくて、そんなことしなくても、はじめから「こども」はそこにいる、というシンプルな予感がある。

わたしは、どうしてこどもと哲学をしてこなかったんだろう。どうやったら、できるんだろう。わたしを満たす予感は、実際のわたしをどのように変えていき、あるいはわたしからどのような抵抗を受け、哲学をどのように使ったり作ったりするだろう。こどもの哲学、って、なんだろう。

やってみることにしたこと

これまで学んできた「哲学」。それは、世界のこと、じぶんのこと、いっしょにいる人や生き物のこと、もっと知りたいと思ったとき、その知りたいきもちを大切にすることのやり方、と、言えそうだった。具体的には、質問することと、応えることをくり返す。

保育園でも、「てつがくワークショップ」として、ともかくこの「質問することと、応えること」をいろいろなかたちでやっていく機会をいただくことにした。申請書に、研究の成果として、どのようなことが期待できるかを書く欄が、ある。「わかるよ」の気持と同じくらいあたたかな「わからない」の気持に、出会って、それをお互い、大切にしあえること。そういう主旨のことを、書いた。

わたしはいつも言葉に依っていて、質問の中味や、応えの中味へ、すぐに入っていくことが多い。でも、中味の「こどもは／なのに、こーんなに（すごいことを、たくさん、色々…）考えているんだ」に注目することは、すくなくともそれが一番の目的では、ない。少し不穏なような、少し恥ずかしいような、少し苛立つような、いろんな気持をひきつけてやってくる「わからない」が、誰かや何かを攻撃するためでも遠ざけるためでもなく、わかるため、愛するためにかたちになって発される瞬間を、ひとつでも一緒に味わえたらいい。それは、いかにして可能か？それを、一緒になにかをしていくなかで、考えてみたかった。

やってみたこと

以下、報告してゆく各回について、録音や撮影はしなかった。文中の会話は、その日中に作成した A4 の「おたより」も助けにしながら頭の中の記憶を頼りに書いていて、一字一句正確なもの、ではない。登場人物はすべて仮名。写真は、ワークの中で園児がとったもの。

申請時には、園児の集中力から、1 回あたり 20 分くらいを予定していたが、平均してその倍の、各回 40 分ほどであった。

園長 矢沢先生

4 歳児クラスぞう組

担任：中島先生

あさかちゃん

あやのちゃん

すずちゃん

ふゆちゃん

ほくとくん

まさきくん

5 歳児クラスらいおん組

担任：坂本先生

きょうちゃん

しゅうじくん

ビーチェちゃん

みかこちゃん

りみちゃん

各担任代理 椎名先生

2015 年 10 月 21 日 コミュニティボール作り

こんにちはーって、言い合う。わたしたちは、顔見知り。リュックにたーくさん詰めてきた毛糸、部屋のまんなかへんに、ざーって空ける。「何ー?」「毛糸やー」「これ何に使うん?」。思い思い、手に取る。わたしは、「うん、毛糸。まだ内緒ー、今から使うんだよー」って、言う。声を出したら、自分がどれくらい開いてるか、よう分かる。標準語のわたしは、いまぎちぎち。10 時からって言うてたし、あと数分、まぎれもない 10 時、待って始めよう。結束バンドは、予備もふくめた 2 本、毛糸の近くにそっと置く。

結束バンドをリミちゃんが「これ知ってる」てつまむ。「ぎゅってするやつ」、得意げ。「リミちゃん見たことある?」うん、家の電気のやつとかについてる。わたし関西の音、少しゆるり。謎の結束バンドは、人気高まる。「触りたい」「貸して」。2 本のバンドはあちこちへ。フユちゃんは、「貸して」のタイミングが、何回も言ってるんやけども 2 本のどちらにもなかなか合わず、あるいは言葉で勝たれへん。フユちゃんの「楽しみ」なきもちは強火、「悔しい」のきもちをじゅーじゅー焦がしてるんが見える。引火するぎりぎり、リミちゃん譲った。安心と感嘆。

アヤノちゃんは、毛糸だまの左右から指を通すと、まんなか触れ合うことを発見。たのしい

発見が隠されることなんかない。それまで色やったたま達は、縦長と横長、になる。ほうぼうから何度でも手を伸ばし、見せ合い、笑う。「わたしはどのたまでも余裕や」言うたら、片方からわたしの指、もう片方から誰かの指で、届くか、って実験も並行して行われます。リミちゃんフユちゃんも、結束バンド大事に傍らに、参加。フユちゃん、本実験にも強火であります。あ、

「10時になったから、始めます。まあ、この毛糸を囲んで座ってくれる？」。場が、きゅっとなった。わたしはどうしてかぎょっとして、その「きゅっ」について、とっさに、「しまった」と感じた。静かで、集中して、言った通りにしてくれ、結束バンドもそっと真ん中に。何も悪いことはない。初めてのこと、緊張するのは当然やし、みんなの手にはまだ大事そうに毛糸だまもある。ほかの学校で、「しまった」なんて思ったことはない。やのにね。

色画用紙かさねて巻いた筒をだす。毛糸をここにまきながら、名前と宝物を、教えてください。わたしから、やるね。わたしは、べえです。宝物は、レコードっていう、大きくて黒くて、まんなかに穴があいてる、音楽きくやつ。みんな知らんと思うけど。リミちゃん、結束バンドだけやなく、レコードのことも知ってた。他からも、意外と、レコードについての声が、あがる。

ほな次、と言いながら、いま右に座ってるシュウジくんについて、「公園とか初めての場所行くん苦手」って、彼の母が言った気がする、で、左に座ってる「フユちゃんからお願いします」って、筒を渡す。

「呼ばれたいおなまえはなんですか？」小さな声で、フルネームが返ってくる。もう、「始めます」の前みたいに、体全部で笑っても怒っても、ない。すごくすごく、きゅって、なってる。「宝物はありますか？」フユちゃんは、ピンクと黄色が混じったみたいな毛糸を、筒に巻いていく。ああ。想像したことなかった、このくらいの小さな手で、筒に毛糸を巻くのは、こんなにも難しいんか。でもフユちゃんは、ちよつとずつ、ちよつとずつ、巻いていく。きゅっとしてる、が、ぐっとしてる、という印象が変わる。フユちゃんは、ちよつとずつ、ちよつとずつ、巻いてる。床と毛糸を、ぐーっとしてる。フユちゃんは、ちよつとずつ、ちよつとずつ、ちよつとずつ、巻いて、ちいちゃな声で、「おじいちゃんちの、らっば」。

らっばのこと、少し訊ねる。フユちゃんは、答えてくれる。フユちゃんの手はやっぱり、ちよつとずつ、巻いてた。「ほかに、言いたいことありますか？」首を横にふって、小さな手、止まった。わたす。次の小さな手が動き出す。やっぱり、きゅっ、と、いつしか、ぐっ。

わたしは「始めます」と、言ってしまうと、きゅっとしてしまった、でも、ぐっとなつて、そっと、言ってくれる。その子のこと、もっと知りたなる。たとえば陳腐な言い方をすれば、これこそを宝物みたいに思う。たとえば見守っていた矢沢先生はあとで、フユちゃんが「らっば」って言ったとき泣きそうになった、って言わはった。「もう言わへんかなあと、思ってた

んやけど」。一周、して、わたしの手に返ってきた筒の毛糸を、みんなの前で束ねる。もうみんな体、動く。ショキ、ショキ、はさみ。わたしの手の平にふわっと乗った、これまで見たなかで一番小さい、雪虫みたいなボール。みんなの、「らっば」、そつとした声が、そのまま形になったみたいやった。



木でできた建物も、天窓からの光も、やわらかい

・コミュニティボールの作り方は、p4c-japan のサイトに、写真付きの詳しいものがある。材料は、さまざまな色の毛糸。芯になる両端の空いた筒。結束バンド等、毛糸を束ねられるもの。裁ちバサミ。その場の全員に訊いてみたい質問を、何個か（その場で募ってもよい）。この時は、2つ「よばれた名前は何ですか?」「宝物は何ですか?」。（「宝物」は、生活綴り方を教えてくださった、なにわ作文の会・土佐いく子先生の、小学校家庭訪問の際子どもに訊いて見せてもらっていたというエピソードを聴いて以来、お気に入りの質問。）

コミュニティボールは、なくても話せるけれど、ある方が、このごろは好きだ。p4c では、「意見発表」をしあいたいのではなくて、そのとき自分のなかにある気持や考えを他の人にも出してみること・他の人が出してみた気持や考えを聴いてみることを楽しむことから始めたい、とわたしは考えている。ボールがないと、もともと「意見発表」が得意な子の声だけで時間が終わってしまうこともある。毛糸を巻きながら、や、ボールをいじりながら、の「黙っている」だと、手ぶらの沈黙よりも、せっかちなわたしは待ちやすい。この回についても、ふだんのモードから切り替わり、緊張して言葉が出ない子たちの声を待つのに、毛糸はあたたかい味方だった。

・「呼ばれた名前」というのが、彼女らにはぴんと来にくいことに、驚いた。呼ばれた呼ばれ方はとくにない、ときよんとする。このときわたしは、きよとん、に対して、きよとん、としかえして終わってしまった。今なら、もうすこし、名前やあだ名、呼ばれ方のことを質問で

きたらよかったなあと思う。どんな風に呼ばれた時に、自分のことを呼ばれてるって思う？「お姉ちゃん・お兄ちゃん」とか「苗字さん」とか、どうかな。たとえば、お母さん・お父さんと、お祖父ちゃん・お祖母ちゃんからの呼ばれ方が違うとき、どちらかのほうが好きだったりする？とか、そういういろいろを、きいてみたかった。

2015年11月4日 ピンクさんに質問を

ピンクさんは今日保育園に初めて現れた、現れた…どんな人？うーん、どのみち、よう紹介しん。とりあえず「この人は、ピンクさんです。ピンクさんには初めて会うと思うので、どんな人か、なんでも、」なんでも「当ててみてください」の、推論ゲームがもともと好き。でも、先週大学でのピンクさんの授業で、同じように初めて来た人に対して「質問してみる」（全部で10個まで、質問できる。その質問への答から、その人がどんな人か、当ててみる）んおもしろかったから、「質問して訊いてみてください」。

もうすでに言いよらんうち、みんななんぼでも訊きはじめている、あー、速くて質問に追いつかれへん、そうそう、「こないだみんなで作ったボール、これ使います。持ってる人が、しゃべる。持ってる人の話を、きく。しゃべりたい人は、手あげて、ボールをもらってね」。ぴゅんぴゅん、手あがる。「なんでも？」「なんでも訊いていいん？」の声も、ぴゅんぴゅーん。

ボールをわたすと、マサキくんやキョウちゃんやホクトくんは、たっのしそように。『なんで髪の毛のけながいの？』うん「髪の毛ね、べえさんと同じくらい長いよね。伸ばしてるの。昔はもっと長かった」うん。『なんで細いの？』はははは！「ねえ。細いんいややから、いっぱい食べてるんやけどね、食べても太らないの」ははは！『べえさんのおとうさんなの？』へえ「違います」うん。

ぴゅん！『なんでめがねがさかさまなの？』よう見てるなあ「これね、さかさまに見えるよね。でも実は、あ、これ見えるかな、分かりにくいんやけど、青と赤が半分になってて。かわいい眼鏡探したんです。べえさんの丸い眼鏡もまあまあかわいいけど。これは気にいって、買いました」??。

ぴゅん！『なんでめがねをかけてるの？』ふんふん「目が悪い、これ眼鏡外したらこの紙手伸ばして持ったらもう見えないくらい」ふむ。

ぴゅん！『なんでさかさまのめがねをかけるの？』あ！！「これ、さかさまに見えるけど、これで合ってる、変な眼鏡なんです」なんか、さっきの、『なんで眼鏡がさかさまなの？』のとき、もやもやした。でも今の答で、両方がすっきり！

ぴゅん！『なんでピンクのズボンはいてるの？』うん「ピンクが好きだから」うん。『なんでピンクがすきななの？』うん「ピンクは昔から好きなんです」ん？。

アサカちゃんや、アヤノちゃんの手、ちびつとあがった。『ほんとのなまえは？』『なんで

手にかざりをつけているの?』それから、『なんでピンクがすきな?』。うん。さっき、答ようわからなかったもんなあ。「きれいな色だから」そうか。

ピンクさんの隣に座るスズちゃんも、そろりと手あげる。ボールもらう。笑顔や。『この手のかざりはほんもの?』おー、ブレスレットについてる石が宝石かってことなんかな? 「ん? 本物。本物です」しまった、質問の意味うまくきけんままになってもた、二人の言う本物ってどういう意味やったんかな?

マサキくん、『なんで男のひとなのにピンクがすきな?』へえ! ジェンダーバイアス、て単語がぼこんと浮かんだ。「男の人だけど、ピンクが好きなんです」3才の息子にはない感覚、ほんの少し年上のマサキくんは持っていること、びつつくり。それはそれとして、今のは、答になってたかな? リミちゃんに、ボール。『えっと、えっと…。はずかしいー。えっと、なんでもきいていいの?』あれ? ちょっと慣れてきた感じやったけど、またはずかしそう。うん、ええよ。訊いてみて。『えー、あのね、ピンクさんはべえさんがすきですか?』ああ、質問することをはずかしがってるっていうか、質問の中味に照れてたんか! 「はい、好きですよ」誰かを好きになるって気持ちに、なんていうか、お母さんを好き、とか、友だちを好き、ていうのと違う種類の、なんでかちょっと照れてまうような好き、もあるって、リミちゃんはきつと感じてるんや。

そろそろ、おしまいの時間。最後にひとつ。何人が拳がった手のうち、ボールはフユちゃんに。フユちゃんは、ボールが手に来た瞬間、突然、べつの生きものになったみたいにもじもじしている。きつと、なんか、訊きたい気持ちっぱいやってんよな、ただ、その気持ちがどんな質問になるかは、まだフユちゃんにもわからない。みんな、待ってくれてる。少しずつ、焦れだして、マサキくん「まだ?」。フユちゃん、きつ! と怒って、「しずかにしてくれないとわかんない!」。おお!

それから、みんな、ほんとにできるだけ静かに、ほんのちょっと隣の子とつつき合ったりしながら、待つ。フユちゃんは、そのつつき合いを見つけては、「しずかにして!」。フユちゃんは、本当の本当に静かじゃないと、考えにくいのかも。でも、みんな集中力がもう限界ななかで、よく待ってくれてて、これより静かは、ここで今、きつと無理やと思った。「うん、でも、みんなできるだけ静かに待ってくれてると思うよ」。フユちゃん、眉間に、ぎゅうっと力入ったまま、ボールを持ってる。時間が少し経つごとに、みんなの集中力が少しゆるんでいく感じがする。今日は、もう無理かも、と思った。わたしも、焦れてたんやね。「もし無理そうやったら、またこんどでもいいよ」。フユちゃんは、わたしを見て、でも何も言わないで、ボールをぎゅうっと持ってた。ホクトくん、マサキくん、「もう外で遊びたい!」。フユちゃん、『なんでピンクがすきな?』。マサキくん「もうきいたやん」とすかさずツッコミ。はは! ピンクさんも笑てる。けど、わたしは、ああ! て思う。そう、何回も、みんな訊いてた

ね。でも、直接の答は、「きれいな色やから」だけで、ピンクさんは、それですませるにはあまりにもピンクで、それはあんま他で見たことないほどで、やから、なんでそんなにピンクが特別なんか、に、もっと秘密があるような気、きつとする。ピンク色のことは、今日一番何回も質問がでて、そのたびにピンクさんは答えてくれたけど、でも、わたしも確かに思う、なんでピンクがすきななの？「うん、なんでわたしもこんなにピンクが好きなのか、わかりません」。

ええ？うーん、結局、ピンクさんは今日保育園に初めて現れた、現れた…どんな人？



つるが下側についている、「さかさま」眼鏡のピンクさん

・推論ゲーム。新しい参加者がきたとき等にやると楽しい、おそらくハワイ p4c からきたゲーム。基本のやり方は、参加者が X さんについての推理をする。たとえば、「猫が好きそう」。つぎに、その理由（推理のもととなった勘が、どのあたりから来ているか）を考え、言う。たとえば、「好かれようとしている感じの挨拶をしなかったから」。X さんは、推理が当たっているか外れているかを答えても（内緒にしても）いい。

11 月から新しく園に、イタリア語を母語とし、日本語はまだわからないビーチェちゃんが来ていた。てつがくワークにも、この回に初参加することを想定し、雰囲気を見て、ビーチェちゃん、あるいは同じく初参加の師ピンクさんのどちらか、それとも二人ともについての推論ゲームをやろう、とぼんやり考えていた。実際には、ビーチェちゃんは欠席であった。

・初回、とても繊細な感じだったので、それをイメージしていたが、はじめから 30 分弱、ほぼ途切れず質問が続いた。途中、スズちゃんの質問（この手のかざりはほんもの？）について、ピンクさんの答えの後、確認しようとしたが、すぐに次の質問が始まった。わたしは、場全体を止めて、確認することをしなかった。スズちゃんに、宝石ってこと？と軽く尋ね、スズちゃんは笑顔のまま首をななめに傾けて、次の質問者のほうに興味を示し、それで終わった。

ふりかえるたび、ここについて、少しとまどう。もしもこれが、例えば高校だったなら、わたしはきっと「ゆっくり、みんなに待ってもらって、共有できるかたちでスズちゃんにちゃんと質問の意味を確認すればよかった」と反省しただろう。そうやって、みんなで丁寧に考えていく場になってゆくことを望んだろう。でも、この日の、この場面については、自分のなかでそれとは少しずれた思いがする。意味を丁寧に確認する、とかではなくて、いや、行為としては同じことなのだけれど、そうじゃなくてもっと、スズちゃんが言ってくれたことをもっと分かっていたいって表現する、ことをしたら、よかった。もしもその結果スズちゃんが、やっぱり小首を傾げて終わったとしても、わたしは中途半端にではなく、もっと正直に、まっすぐに、スズちゃんの言ったこと分かっていたい、でも今分からなくてちょっと悔しいとか残念とか、いうのを、それだけを、自分全部を使って出せたらよかった。

重箱の隅をつつく、とかじゃなくて。「ほんの些細なことなのだけれど、でも、今、分からなくて悲しかった、もっと、あなたのこと、あなたの言ったこと、知りたい」を、恥ずかしがったり面倒くさがったりして、封じ込めないこと、大切にしていいたってこと。わたしは、高い声も低い声も、本当は持っているし、眉も、手も、本当は動かせるのに、ふたことみこと話す地蔵みみたいだ。これじゃあ、いままでと、変わらない。

2015年11月10日 園庭

園庭って、見てるだけやと何もわからんけど、足ふみ入れだすと、小さいなあとか、感じる。

わたしが着いたとき、みんなはのびのび遊んでる。スズちゃん、アヤノちゃん、アサカちゃん、うんていからジャンプ！「べえさーん！みて！」って元気な声。ほんの短い時間そばにおるだけで、小さいけんかしたり、仲直りしたり、三往復くらい、たちあう。今日は新しく、イタリア語を母語とする、日本来たばっかのビーチちゃんが参加するかもしれんかって、わたしはこの何日か割と、どうしたらええかなって思ってた、結局とりあえず電子辞書を持って来た。でも、今日、ビーチちゃんはお休みでした。今日、天気は晴れてませんでした。しろい曇りで、たぶん低気圧で、わたし重たい、「ずり づづづ」で『わにわに』の音、頭で言うて歩く。

ミカコちゃんたち、はしっこの畑のところにいる。ぶらり づづづ近づいてみると、ブロッコリーとか。青虫をとってる。リミちゃんが3匹くれる。手の平の青虫、いっぱい目で、じいに見える。ホクトくんは、生きものがとてもすき。ミカコちゃん、「そうだ、掃除しよう」と小さい竹箒、しゅっ、しゅっ、いい音しだす。「わたしもー！」って続く子らが、いる。転んだかなんかで鼻血でたシュウジくん、坂本先生と保健室いつてくる。園庭には、なんでもある。

ピンクさんがすこし遅く来た。青虫をすこしきもちわるがっていた。うんどこ、そろそろ始める づづづ。青虫は、畑と反対のすみっこ行って、葉っぱのうえにのせといた。

前回、みんなの質問は、全然とぎれんかったししかも、送り迎えで会うごとに、「べえさーん！こんどピンクさんくるー?!」って、何人もに訊かれた。なぞのピンクさん、大人気。人気には、あやかりや。「この園庭のなかで、ピンクさんに似合う場所ってどこかありますか？どこかおすすめの場所思いついた人、教えてください」。

「ここ」。円柱型にはりめぐりのぼりぼうの内側、に入る。砂場のわく、を歩く。うんていの下、に座る。「場所」には必ず動きがある、ただの場所、なんかいっこもない。最初、なんとなくの違和感があつて、だんだんと、気づきだす。わたしにとっての「場所」が、どんなけ、まさにその「ただの場所」で、かちこちで、「風景」と同義やったことか。案内してくれる場所に、みんなといっしょに着いていきながら、がーん。

シュウジくんは、木に案内してくれる。「どうしてこれが似合うと思いましたか？」って訊くと、「ピンクいろみたいな、あかいはっぱがあるし、のぼったりもできるから」。確かに、低い枝があつて、シュウジくんは体をあげようとする。低い言うても、えいやあ！が必要なくらい。シュウジくん、何度も、見せようとしてくれる。がんばれ！よいしょ！、やったあ、上体があがる。ニコニコしてる。他の子も、同じように、見せてくれる。ふふ。ええね。ええ場所やね。うん、場所、場所や。ありがとう、この木、「場所」になった。ピンクさんは、「こういう、植物、木とかが好きなので、確かにここ好きです」って、言うてる。

このとき、みんな、と言いながら、全員、が、いっしょにツアーしなくなりだしている。前回や前々回では、緊張した様子やったアヤノちゃんや、スズちゃんが、途中でふつうに他の遊具で遊びだして、ほんまに楽しそう顔してて。わたしは、ぼんやり、それはそれでいい、て思ってた。どんな場所が似合うか、遊びながら見つけてるんかもしれへんな、とかなんとか。でも、ピンクさんが、「次は何をするか、みんなにちゃんと分かるように」という旨の注意を、してくれはった。わたしは、焦った。そう、や。ぼんやりの「それでいい」は、違う。哲学と、違う。ただの、怠惰。「みんなで一緒にやらなあかん」とか、そういう話やない。なんでこっちに來おへんのかな、って思ったら、それが分からんかったら、それを、訊いたらいい。知ろうとしたらいい。今のわたしは、そもそも「なんで」って思う気持ちを、どっかにほったらかして、すつとぼして、勝手に「なぜなら」をねつ造。わたし、ただ、さぼってた。わたし自身が、みんなと、おらんかった。何しとんねや。

だらだらしてると灰になる。ぼんやりしてても時間は過ぎてる。ああ。そろそろ、おしまい。みんな集まって、親指で楽しかったか、評価して、おおむね真上を向いており、「まあまあ」の子がちらほらおる。「いつもの園庭でも、今日みたいに、なんか探してみたらおもしろいかもしれない」みたいなコメントで、しめようとする。「たとえば、小人が隠れてそうな場所はどこかなー、とか」言うたら、瞬間、ぼんぼん出てくる。連れてつてくれる。ドアの、下んとこ。畑。靴箱。石の下。葉っぱの下。雨どい。うん、うん、おりそう！でも、そこで自分の気

持ちが、止まって。「もうふつうに遊んでもいい？」うん。

みんなが、せっかく考えてくれても。わたしは、自分が風景みたいになってた。見たり聴いたり、できてへんかった。それで、みんなのこと、今、書かれへん。てつがくは、自分のなかの知りたいってきもちを、感じて、言う。頭でめざすそれを、でも、正直なところ、どうしたら、いいのか。青虫は、置いたところ見たら、もう、1ぴきもいなかった。この日の気持ち、わたしは長らく、ずり ずり づづづ。



らいおん組からみた園庭

・哲学散歩。2013年にオランダの哲学者ピーター・ハーテローさんから習った。（詳しくは、立教大学教育学科研究年報、第57号、2013を参照。）①紙に、哲学者の言葉からの引用が一文書かれたものを、参加者はおみくじのようにひく。②目的地を設定し、ひいた一文を考えながら、参加者全員で歩く。考える内容は、その一文を「一語」にするならば何か、と、その一文に最もふさわしい場所はどこか。歩く際は、会話をしない。（「Walk or Talk」）目的地につくまでの間に、必ず場所を見つける。③一文にふさわしい場所を見つけたら、手を挙げてほかの参加者に知らせ、全員立ち止まる。一文を読み上げ、「一語」を述べ、場所と、そこを選んだ理由を言う。他の参加者は、見つけた人に質問をする。④見つけた人は、出された質問から一つを選び、のこりはその問いについて考えながら歩く。（その場では答えない。）歩き出す前に、その人と場所の記念写真を撮る。⑤目的地についたら、元の地点に戻り、場所を見つけた順に円になって並ぶ。それぞれの「一語」を書き出し、その「一語連」から連想される物語を考える。その際、撮影した写真も映し出して見れるとよい。

その後、ピンクさんをはじめ、研究室の人たちと、手ぶらで歩いて問いを作る ver.、自作の詩を

引用文代わりにする ver.、落ちているものを拾って置き直す ver.なども体験。

・今回のワークは、哲学散歩の延長線上にある。みんなが同じ問いをもって、歩いてみる。考えながら歩くと、なじみある場所も、よくわからなくなることがあって、そしてわかりなおすことがあって、楽しい。

・「分からない」の一番反対にあるのは、「なにも感じない」だと思う。わたしはこの日、本当は少なくとも「調子悪い」を感じていたのだから、せめてそれを出せばよかったのに、隠蔽した。自分のちんけな頭の中だけにしか居なかったから、感じることもどんどんなくなっていった、場所にも、みんなと一緒に、なかなかいられなかった。

2015年12月3日 音の動物

楽器の箱置いたら、もうみんなさっそく手に取って、小さな部屋に、どんどんどん音があふれる。自分も適当に手にとって、ああ、音出すの、楽しいよな、と本当に、一瞬思った後、わたしは、大混乱のなかに入った。ふだん、あんまりそういう機会ってないから、普段ちつとも備えてへんけど、そういえばわたしは、いろんな音がどうじに大きく聴こえると、なにがなんやら分からなくなってしまうことが時々ある。そして残念なことにこの時がその時。でも、なんでか自分で、自分の混乱をいまいち把握できてへん。あたまのなか、「えーと、えーと、えーと、えーと…」出だしから進まれへん、「どうしようどうしようどうしよう」も詰まってきた、なんや？なんでや？楽しいねんけどな？？？えーとえーとえーとどうしようどうしようどうしよう、ああこの木の実のやついい音、やな、楽しい、な、えーとえーとえーとえーとえーと、あー、あー、そうや、コーハンさんの、音の動物、やろうと思て。

「えーと、始めます」一変。みんな、しんとなる。なにかがほっとして、同時になにかがちくちくと、残念さとしてやってくる。「今からね、一人一つずつ、楽器で音を鳴らして、その音がなんの動物に聴こえるか、教えてください」。ええと、ビーチェちゃんにも、説明できたらいいんやけど。単語、とぎれとぎれに、辞書をひきつつ、なんとか言おうとしていたら、ピンクさんが「そなん、説明するより、やってみるほうが早いですって」と言って、一つを手にとって鳴らし、「これ何の動物に聴こえる？」とみんなに訊いた。そうか、め、めから鱗。

鳴らしてみたい人？に、手を挙げてくれる子、動物を考えて言ってみる子。ぴしっと、一つずつ、進んでいくわけではなくて、微妙に、次がどどん重なりながら、でも、最初みたいなのびのびしているわけでも、なくて。なんだかどちゃっと、淡々としている。たぶん、みんな、なんか、ちょっと緊張してる。わたしは、重なりを止めて一つずつ、にもせず、また混乱しつつあった。なんか、変な感じで、この変な感じはきっと自分のせいや、と思うと、余計に頭も動かない。

音に対して出てくる発想は、とてもおもしろい。最初、辞書でビーチェちゃんにも分かるよ

うにって単語を調べてたけど、それもピンクさんが「描いたほうが早いです」って言ってくれはって。そ、そのとおりや…と思った。麻ひもを編んだなかに、小さな木の実かなあ、入ってるマラカスみたいなのが振られる。フユちゃんやったか、ミカコちゃんやったか、「貝がおわかれするときの音」って。貝と貝がお別れするん？「うん。うみで」。貝がおわかれするときの音、って、なんて美しいんやろうって、わたしはびっくりした、のに、この時も、全然みんなにそのびっくりを伝えられへんかった。もう鳴っている次の音に集中しはじめている子もいる。ただ、「ちょっと待って」って言えばいいだけやのに、わたしは、言わんかった。もし同じように、誰かの言ったことをきいて、もっかい音を聴きたくなくなったり、もうちょっと言われたことを考えてみたかったりした子がいたとしても、「待って」ってもっときつと言われへんかったやろう。自分で自分を居心地悪くして、それは、ほかのみんなにも繋がることや、みたいなことが、文字みたいにさーっとよぎった。でも、私の声はあいかわらず全然小さくて、提案もふらふら遅くて、頭の中はもうえーとえーとえーとえーとえーと…。世界の色味が一段、下がる。私は、鼓動だけ異様に早い。

ピンクさんが、途中から、音を鳴らした人に、出てきた動物のうちどれが一番いいか、訊く。えーとえーと、なるほど、これから、わたしも訊いてみよう。マサキくんが、ウクレレの音に「ギターのかえ」って言ったとき、ピンクさんが「ギターって動物かな？」って訊き始めた。わたしはこの時、動物のことを訊いていて、でもそういえばなぜかいわゆる動物じゃないもの名前があがっている、ってことを、疑問に思う心を持っていない自分に突然気づいて、動揺した。マサキくんは、「違う」って言った。顔がないから、って。おもしろいな、と思った、そして、異様に疲れていた。ピンクさんがまた、今度はみんなに「ギターって顔が見えるところないかな」って訊いた。そうしてそろそろ時間が終わりに近づいて、でもわたしは今の時間についてなんのかけらも浮かばなくて、やっぱりピンクさんが「じゃあ、みんな楽器で動物になって、行進しましょう」って言って、みんなで鳴らし始めた。もう全然、何も、私はしていなかった。時間が数秒たつごとに、音は大きく重なりますますわけがわからなくなって、でもスズちゃんがわたしの隣でずっと、二拍子で、ちゃんと行進のときの足、みたいに、ずっと、周りがどんな音になっていってもずっと、みんなを見ながら鳴らしているのを、見てた。茫然としたまま、今日はこれでおしまいです、というようなことを、多分言った。

ホクトくんが、「もう遊んでもいいの？」と喜びはねるように立ち上がり、あっというまに姿が見えなくなる。ビーチェちゃんは、ミカコちゃんと猫ごっこを始めている。のびのび、楽しそうにしている。坂本先生が、「誰も教えてないのに、こども達は、ビーチェちゃんが来て以来、共通語である『猫語』で遊び始めた」ということを話してくれた。みんな、遊びごとに分かれる。まだ楽器にさわっている子もいる。まだ頭の中を、血がざわざわしてる。でも、少し落ち着いてきた。「スズちゃんの動物は、行進できつとすごく遠くまで歩いていったねー」

と言った。横にまだそっと座っていたスズちゃんは小さく、首を動かした。頷いたみたいにも、傾げたみたいにも見えた。でももう、それ以上、わたしは何も訊けなかった。わたしは、ほんの数分前までやっていたこのてつがくワークを、なんだかとても申し訳なく思った。



らいおん組の棚の上

・まちなね保育園ではこれまでに、矢沢先生の知り合いの音楽家が、民族楽器をつかったワークショップをしてくれはっていた。音を、一人ひとつづつプレゼントしてくれたりしはって、すごく楽しいもの。そして、子どもたちが使える楽器が、園にいろいろある。ピンクさんも、音楽がお好きなので、楽器をたくさん持っている。

・動物の音ワークショップは、以前ブラジルから来られた哲学者コーハンさんが、即興でつくって、やってくださった。わたしはそれが好きだった。円になり、一人一つづつ楽器で何か音を鳴らし、ほかの人はそれを聴いて、どんな動物だと思うかを言う。一巡したら、「自然とは○○である」の○○にあてはまる言葉をそれぞれ考えて言う。

・わたしはこのころ、言葉をできるだけ使わなくてすむように、ということをとっても考えてた。すぐに言葉の中味にばかり浸るこれまでの自分とは、違う自分でみんなと哲学してみたいって、考えてた。それから、たくさんの日本語は、ビーチェちゃんと一緒になにかやることの邪魔になるんちゃうかって考えてた。あほすぎて、全部、ひとりで頭のなかで、勝手に考えていた。先生方や、ピンクさんに「相談する」という選択肢を、なぜか頭のなかに持っていなかった。

・少し前に哲学プラクティス連絡会というのが東京であって、その時小さな子どもとp4cをやっているという方にお二方お会いした。そのうちお一方は、議論に近い、というか、意見の内容が大人にとっていかにおもしろいものであるかを発表してらしたように感じた。わたしは、これは自

分の思うやってみみたいこととは違う分野だと思った。もうお一方は、クリエイティブな感じのワークもされているようだった。言葉を使わないワークについてのアイデアを伺ったとき、誰かが描いた線にどんどん描き足していく、というものを教えてくださった。とてもありがたく思った、けれど、何かよくわからない小さな違和感が自分の中に残って、その違和感をすこし眺めて、「ああそうか、このアイデアは種だから、自分でちゃんと水をやらないといけないってことだ」と思った。当たり前だけど。

この回のワークは、この時の違和感と同じ感じだった。わたしは、種をほり投げただけだったと思う。

・わたしは「待って」を言うべきだった。かなり混乱していたこの回だけではなく、いつも、とてもそうだ。「待ってもらうのが申し訳ない」の気持から成る態度を私がとっている限り、結局のところ、一緒にやってくれている子たちにも、同じ気持や態度を強いることに、きつとなる。

「分からない」って思った時、それは、具体的ななにかではなくて、もう、その場の居かた自体が分からない、ってことでも、その気持を大事にできたら、って言いながら、一番大事にしていなのは、ほかならない、わたしで、矛盾している。

・一回に、一人（一つの楽器）にはしなくても、よかったかもしれない。何人も手を挙げてたら、同時に鳴らしてみても、よかった。大事にすべきは、一つの音に対して考えている、その時間を大切にすることだった。ただ、焦れる子に合わせていたら、ゆっくりな子を永久におきざりにしてしまう。やっぱり、とにかく一度、「待って」ってちゃんと言って、せめてみんなの顔をみわたしてみないと、どうしようもない。わたしは、みんなのことを、本当に全然見れていない。この回については、音の問題があったことを別にしても、わたしは、結局そのとき最も声が大きい子にしか注意をはらっていない。

・感じるができないとき、哲学は、ぜったいにできない。

・遊びは、遊びの概要を説明なんてしなくても、始まる。わたしは、いつも説明をしたがっている。説明を始めるから、目の前の、さっきまでのこどもが、いなくなってしまう。

2015年12月15日 写真をとる

ピンクさんは、授業で使いはるので、学校にビデオやカメラをたくさん持ってはる。わたしは、人数分カメラをお借りして、それぞれ3枚、写真を撮って、それをみんなで見てみたら楽しそうやな、て思っていた。どんなふうに、何を撮るのかな。以前、夫が普段の生活のなかでスマホで撮ってる素朴な写真を一緒に見る機会があって、よく聞くことやけど、ああほんまに写真ってその人が何をみてるかがわかるもんなんやなあって、おもしろいなあって、思ってた。どんなふうに、何をみてるのかな。ところが、完全なホウレンソウ不足で、当日ピンクさんが持って来てくださったのは、4台のビデオカメラだった。保育園には、大学も関係する規定が

あって、写真やビデオを自由にとることはできない。今回のワークでは、写真を撮る許可を、いただいていた。動画は無理なので、ビデオカメラで写真を撮ることになり、その操作の確認とかで、出足がかなりもたつた。

ビデオを使って写真を撮ること、撮った写真を見ることは、みんな楽しそうだった。その場でみるのには、持っていったPCを使った。「これアヤノちゃんのおしりやー!」「何これー?」「マサキくんの目!」「これわたしが撮ったやつ!」と、どの写真にも歓声があがる。ひととおり、見終わる。もうそんなに、時間も残っていない。

結果として今日は、一人ひとり、撮る枚数もタイミングも、入り乱れるかたちになった。それはそれでおもしろかったから、撮られた写真そのものというか、写真を撮ること、見ること、どうして、どこがおもしろいかなあ。どんな時に、どんな写真をとりたいかなあ。みたいなことのほうに、わたしは関心が向いた。簡単な、答えやすい質問にしなな。「えーと、今日、いま、撮ると、撮られると、見るとやったけど、どっちのほうがおもしろかった?」。ミカコちゃんが、「どっちもおもしろかった!けど、見る方が、なんかすごい近くとか、ふだん見てないのも見えるからおもしろかった。撮られるんはちょっとはずかしいけど」。(確かに、ふだん見てないものも、写真で見れる。でも、その背景に、写真でそれを見れるかたちに、その撮り手の注目するところ、みたいな、感性、みたいな、そういうのがあるのが、おもしろいのかも。ぐるぐる。かんたんなことば、出てこい…、こない。)ぐるぐるしてるあいだ、結局ただ黙っているわたし。キョウちゃんが、「撮るんがおもしろかった」。どういふところがおもしろかった?「えっと、好きなもの撮れるところ」。ふんふん。(好きなものが、かたちになるって、なんで嬉しいんだろう、みたいな、今はこう言葉で書けるけど、なんとなくの印象がぼやぼや。)ぼやぼやしてるあいだ、結局ただ黙っているわたし。おもしろいのに、何も返せない。

ピンクさんが、「さっき撮った写真のなかで、どれがおもしろかった?もっかい見たい写真ある?」とみんなに訊く。ホクトくん「アヤノちゃんのおしりのやつ!」リミちゃんフユちゃん「マサキくんの目のやつ!」等々。結局、ぱっと見では何かよくわからない、推定マサキくんの鼻、の写真を見る。わたしは、ただ、ああ、てなってる。新しい波のほうに、はよ乗らな。ピンクさんが、「これなんに見える?」。「鼻の穴」「くちびる」「ほらあな」「え、ほんまに鼻やで」等々。

今日は、いつもにまして長く時間がたっている。ホクトくんが、「ねー、まだ外行ったらあかんの?」と焦れている。わたしは、「うん、長くなってごめん」と言って、ハンドサインの評価だけして、そのままこの回をしめた。



なんに見える？

・ハンドサインの評価。みんな円になったまま、せーの、という感じで、各々手の親指をだす。このてつがくワークでは、だいたい「楽しかった？」だけを訊いている。楽しかった、なら、親指は上向き（オッケーサインのように）。楽しくなかった、なら、親指は下向き（ブーイングのように）。まあまあは親指は横向き。そのあいだのグラデーションは自由。

・わたしは何がしたいのか、誰にもうまく説明できていない。そもそも、この回、ビデオカメラを4台、になったことは、単純なハウレンソウミスというよりも、やってみたいと思ったことを、一緒にやってくださる大人に、まったくシェアできていないことを意味している。

のちに、ピンクさんから指摘いただくことだけれど、この報告を見ても分かるように、わたしはワーク中の園の先生との距離もどうとっていいか判断しかねていて、結局のところただ無視するかたちになっている。たとえばこの回るとき、出足にハプニングがあったのだから、先生方にご協力いただけるか確認して、準備し直すまでのあいだ、べつの遊びをしていただけないかお願いしてみたりすればよい。困った時に、空間内には大抵、わたし以外にピンクさん、坂本先生、中島先生と3人も大人の目があり、手があり、頭があるのだが、わたしはそのことに気づきさえしていないのだ。

・全体として、「しっかりやらなくちゃ」「上手にやらなくちゃ」という、誰にも課されていないプレッシャーを一人で感じ、背負い、かつ、「なにを」の部分がまったく明確にできていない。これは、信頼の問題であるように、今は思う。「ちょっとくらい何か失敗したり、問題が起こったとしても大丈夫」というメッセージをくり返し与えてくださっている園の先生方のことも、たくさんアイディアの引き出しをもっている指導教員のピンクさんのことも、無意識に、信頼するのをこわがっていた。「先生」＝評価者という強烈な、しかし勝手なイメージで、目の前に居るその人を

覆いつくして見ないようにしていたのかもしれない。今やっと、本当に自覚できたことだけれど、これは、やりたいと思っているはずの「こどものてつがく」から、いつまでも自分で自分自身を遠ざけている、甘えたふるまいだった。

2016年1月8日 写真をみる

この日は、ピンクさんは来ない。

前回、せっかく撮った写真やけど、じっくりは見れへんかったから、今日は、写真を見て、写真から、一緒になにか考えられたらいいな。そのうちの何枚かを適当にピックアップして印刷し、黒画用紙を台紙にして、らいおん組の部屋に持っていった。入って割とすぐ、始める。

「これな、こないだみんなが撮った写真。美術館って、知ってる？いろいろな絵とかが飾ってあるところ。この写真、部屋に貼って、写真の美術館にして、みんなで見よう」。養生テープをちぎって渡す。一人1枚、写真を貼る。「どこでもいいよ」に、椎名先生が自分の背中に貼ったら、リミちゃんが「だめ！」と一生懸命怒っていた。リミちゃんは、「ちゃんと部屋に貼ってほしい！」。そうかあ。棚の横、ロッカーの扉、壁、窓。

まずはみんなで、ぐるっと部屋を回って見た。「これぼくが撮ったやつ」「キョウちゃんが写ってる」等々わいわい。ほな、今度はどれかみんなで一つを選んで、じっくり見てみようと思ひ、「今からどれか一つを選んで、5分くらい、みんなで見てみようと思うんやけど、どれがいい？」。ぼんやり、多数決で決めようか、と思っていたけど、みんな、体ごと「わたしこれ！」「ホクト、これがいい！」と、それぞれ写真を選んで、その前に。一瞬迷う。やっぱりみんなで同じ一つ、を見るか。このまま、それぞれ別の写真を見るか。この時、わたしは、わたしのやりたいこと的には、みんなで同じ一つ、だということは、わかっていた。だから、実際には、自分のやりたいと思ってたプランをもういちど丁寧に提案してみるか、今すでに楽しそうなこの目の前の雰囲気のまま続けてみるか、という二択だった。今思うと、後者は、とても難しい。高校生とでも、無理だと思う。でも、この時は賭けをそっちにはしてみた。「うーん、みんなでどれか一つにしようかと思ってたけど、まあいいや、じゃあみんなそれぞれ好きな写真でやってみよう。今から5分、どれか一つを選んで、じーっと見てみて。長いかもしれへんけど。あとで、何を発見したか、きくね」。

5分のあいだ、じっと座ってみてたシュウジくんは、ピンクさんが写っている写真を選んだ。何を見てた？何かおもしろいもの見つけた？「ピンクさんのよこに、指差してるのがあって、それがおもしろかった」。ビー玉の写真を選んでたりミちゃんは、「この黄色がきれいやなあと思って、ずっと見てても飽きなかった」。かがんでるアヤノちゃんの後ろ姿が写ってる写真を選んだフユちゃんは、「おしりはおもしろい」。ぽつぽつ。

今度は、手挙げてない子に、きいてみる。5分、長かった？何かおもしろいことあった？ホ

クトくん、マサキくん、「おもしろくなかった！たいくつ！」。そうかあ。スズちゃんはどう？
「ながかった」。なにか見つけた？「うん」。アヤノちゃん「なにもみつけてない！」。

「そうか。退屈やったかー」と言いながら、どうやったらみんながたいくつじゃないか、分
かりたいなって、すんと思う。『退屈なことって、どうやったら退屈じゃなくせるのかな？』。
ホクトくん、「えー、退屈はずっと退屈だから、なくせない」。

「そうなんかなあ？じゃあまず、どんな時、退屈って思う？」ホクトくん「他のひとが話し
てるとき！」他の人が話してたら、って、いつも？「うん！」。ミカコちゃん「待たされてる
とき」なるほど。マサキくん「じっとしてるとき」。

『そういう時って、なんで退屈なんやろうな？』。ホクトくん「あのね、うーん、あ！勉強
にならない」。わあ、なるほど！勉強になるってどういうこと？「おもしろい」。ふんふん。

『じゃあ、退屈じゃないんってどういう時かな？』。リミちゃん「自分で選んだことやった
ら、退屈じゃない」。『じっと見てたら、いつでも退屈？じっと見ても退屈じゃないとき
てある？』ホクトくん「雪の結晶は、じっと見ても退屈じゃない」そうか。雪の結晶と写真
は、どこが違うん？「雪の結晶は、つながってるから」1個の結晶がまた別の結晶につなが
ってるってこと？「そう」。マサキくん「え、寒いとき退屈じゃない」。寒いとき？「うん、寒
いから」。

そろそろ時間。今日は、退屈やった人は、ごめんね。指の評価の時、横向き多し。じっと黙
ってたスズちゃんが、下向きに、びっ！て出してくれて、おお！と思う。



・みんなで一つの写真を見る、というのは、とりあえずもっとしっかり、明確に、やってみたい
こととしてみんなに言ってみるほうがいいポイントだった、と今は思う。ただワークの形式を考え
たのではなくて、やりたいことがあって、形をぼんやり考えていたはず。形を臨機応変に変えてい

くことは大切だけど、やりたいこと自体までぶれてしまうようなときには、ちゃんとふみとどまらないといけない。

・マサキくんの「寒いとき」というのは、その時には、「??なんかおもしろいな」という感じで見過ごしてしまったけれど、たしかに「退屈」は、寒いとか暑いとかお腹すいたとかそういう感情より優先されて自分に出てくることはめったにない。ほかの気持と退屈との関係をもうすこし考えることもできたかもしれない。

・ホクトくんの退屈についての答えは、わたしにとっても発見をくれた。まず、「他の人の話をきくのはそんなにおもしろくない」は、進学校などでも態度として出会ったことがあるけれど、なんとなく、それとはちょっと違うものを感じた。ホクトくんの場合は、ウェイトが「話をきく」にかかっている、高校生の場合は「他の人」にかかっている感じが、する。たしかにわたしは、一つ一つの発言と、ほかの発言や、人や、世界と、ちっともつなげる努力をできていなかったと反省した。

・もっとこうしたらよかった、と思う部分はやはり多くあったけれど、わたしは、この回を、おもしろかったな、とも思った。

2016年1月26日 お父さん、お母さんのこと

今日もピンクさんはお休み。

ついたとき、らいおん組にはまだぞう組メンバーは来ていなくて、まったり。床に落ちてた、五味太郎『こんなとき きみなら どうする?』をぱらっとめくり始めると、キョウちゃんが来て、一緒に読む。わたしは、初めて読む。見開きごとに、たとえば山登りで、ロープウェイがあったり、道もいろんなのがあったり、みたいな絵があって、キョウちゃんと、「どれがいい?」「なんで?」って言い合う。わあこの絵本楽しいな。このまま、これみんなで作るだけで、十分楽しいやろな。

このころ、色々あって、わたしは、親や子のことを、よく考えてた。それで、みんなは、親のことってどう思ってたのかなあって、なんとなく知ってた。以前、なにわ作文の会の土佐いく子先生の本に出てきた、授業参観での小学生たちの「どんなときに、おとうさんやおかあさんのこどもでよかった、と思う?」「おとうさんやおかあさんへの注文、言いたいこと」リストがおもしろかったなあと思いました。それから、土佐先生から学んだもっと大きな、「他の子の書いたものや言ったこと聞いてると、そのうち自分も書いたり言ったりしたくなるんよ」ってことも、心にしんしんしていた。これまで、このてつがくワークで、何回もひっかかった、「はじめます」の反対は、たぶん、土佐先生が前教えてくれた、こういうことなんかもしれへん。それで、大きな模造紙に、『子どものまなざし』（日本機関誌出版センター、2009）から、うつして大きくどンドン書いた。家族が笑顔のとき、さみしかったらいっしょにねてくれるとき、お金がないのにぼくにお金くれるとき……生まれたときはだっこして優しかったけど今は

犬にだけ優しい、「これから片付ける」って言うてるのに「片付けへん」って信用してくれへん、自分が物なくしたら「アハハハ」って笑ってるくせにわたしやったら怒る……

書いた模造紙を広げて、「これな、小学生のお兄ちゃんお姉ちゃんらのこたえやで」と言って、みんなで囲んで見ながら、ひとつずつ読んだ。合ってるか自信ないけど、イタリア語でも書いてた、ビーチはお休みやったから、日本語のほうだけ読んだ。じっと、聞いてくれる感じがする。「それでな、こんなふうに、『どんなときおとうさんやおかあさんのこどもでよかったと思う？』に、こんなとき！っていうの、思いつく人いますか？」模造紙を半分に折って、『どんなときおとうさんやおかあさんのこどもでよかったと思う？』とその答えのほうだけを見えるようにした。

マサキくんが、「え、『言いたいこと』のほうでもいい？」って訊く。「ああ、そうやね、ほんなら、『どんな時におとうさんやおかあさんのこどもでよかった、と思う？』と、『おとうさんやおかあさんへの注文、言いたいこと』、どっちでもいいことにしようかな。」模造紙を、ぜんぶ広げた。さっき読んだものが、全部広がった。アヤノちゃんが、よくわかっていないようで、それに気づいた中島先生が、「聞いてごらん」と促してくださっているのに、気づいた。指差しながら、「じゃあ、『どんな時におとうさんやおかあさんのこどもでよかった、と思う？』でもいいし、『おとうさんやおかあさんへの注文、言いたいこと』でもいいし、どっちでもいいから、何か思いついたら教えてほしいな、と思うんやけど。両方やと難しいかな」。アヤノちゃんは、中島先生のよこで、そっと笑って首を横にふる。わたしの正面のミカコちゃんが、「ううん、大丈夫」と言う。「まあ、じゃあやってみよう」。その横に、白紙の模造紙を、広げた。「ここにね、みんなが言ってくれたやつ、同じように書いていってみようかなと思います」。

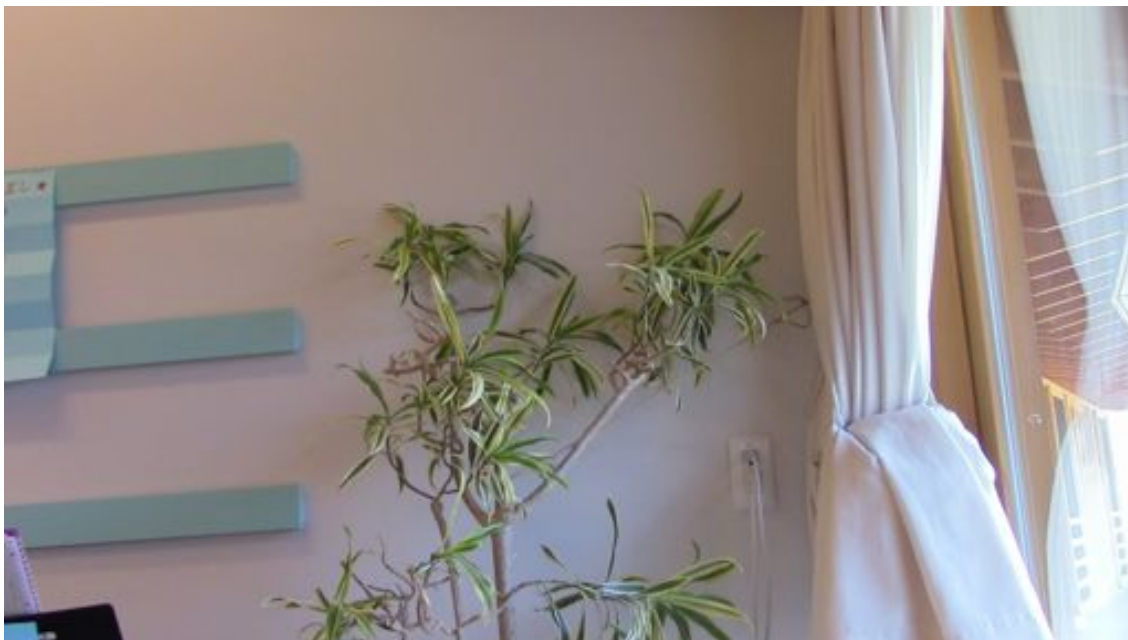
マサキくん「おかあさんが『おばけ呼ぶよ』とか言うんがいや」。ははは、うんうん。キョウちゃん「あのさ、パパとスカイプするときさ、ママとわたしが最初にかけたときに出なくてさ、もう家出る時になって、パパのほうからかかってくる。だから『ちゃんと最初にかけた時に出てよ！』って言う」と笑う。ふふふ、かけたときに出てくれへんといやなんや？「うん」じゃあ、スカイプちゃんと最初にかけたときでて！て書いとこか。「うん」。ホクトくん「ホクトくんもおもしろい話ある！おもしろい話していい？」うん、どんな話？ホクトくん、テレビ芸人のギャグをかます。ははは！おもしろい話っていうかおもしろいこと、やがな。おもしろい話で、おもしろかったからお父さんやお母さんのこどもでよかったなあって思ったり、おもしろいけど、なんか文句じゃないけど、ちょっと言いたいことがあったら、また教えて。

みんなの、色んな話、たくさん、出てくる。ふだん、あまり話さない印象のアサカちゃんが、手を挙げる。「あのね、お母さんとブランコに乗ってる時に、アサカが落ちそうになったときに、お母さんはたすけてくれたのに、お母さんが落ちそうなときに助けてあげられなかった」。

そうか、お母さんは、助けてもらえへんかっても助けてくれて、優しいんやなあ。「フユちゃんもさ、あのさ、ブランコから落ちそうになったときあるよ」「ホクトくんも落ちた！」……。だんだん集中力が切れてくる子が増えてくる。いつも、あやふやなわたしの説明のなかにある、一緒にやりたいことを上手につかんでくれる、ていう、優しく、頼もしい印象のあるミカコちゃんが、今日は何度も手を挙げる。「一緒に寝てって言ってね、いいよって言ってたのに、寝る時になつたらね、下の兄弟がお母さんの隣で、わたしの横じゃなかった」「あのね、ママとパパがけんかしてる間は、子どもだけで遊んでるからね、それはいいけど、そしたら、そのとき下の小ちゃい子が、まだ、赤ちゃんではないけど小さいから、こけたりしたら大変やから、そういうので呼んだときは、もっとすぐ来てほしい」……。

みんなのことばを、なんだか身につまされながら聞くことがいっぱい、胸がいっぱいになってきて、あんまりさらに訊くことが、なかった。でも、今日はなんか、話してくれて、それを聴けて、よかったなあって思った。

最後に感想の親指を出すとき、ミカコちゃんが、「今日はほんとに楽しかった」って小さな声で言った。終わって、おのおの遊びに行く。片付けてるとき、キョウちゃんが、「まえね、マサキくんは、てつがくワークいややから、休もうかなって言ってたよ」と教えてくれる。そうなんか、それはごめんやなあ。どういうところがいやなんかなあ？「うーん？」うーん。今度きいてみよ。



まどぎわ

・「始めます」は、それを言うだけで魔法が使えてなにかが始まるわけじゃない。あたりまえのことだが、実際、ではどう始めたらいいのかが、わたしはこの回まで、今ひとつ掴めていなかった。

ほかのひとが出したなにかに触れると、自分のなかで何かが出てきそうになることは、確かによくある。何を始めたらいいかを何回も説明するよりも、なにかが既に始まっていたり、すでに始まったことのあるものに出会ったりすることで、始まり始める、ほうが、たしかに楽しい、とやってみて思った。

・ホクトくんが、笑えるおもしろい話を、何回かしようとして待っていてくれた。マサキくんのこと、気になっていた。この回に、じゃなくても、みんなにとって「おもしろい」ってどういうことなんか、もうすこし考えてみてもよかったかもしれない。

・子ども達がどんなことを感じているかを知れて、わたしはおもしろかったけれど、この回はとくに、おたよりを通して、保護者の方が子ども達の考えていることを知り、どんなことを思ったかなということも、いっしょに知りたかった。けれども、保護者同士の関係性としてまだあまり密でない、ということを感じてしまい、結局尋ねなかった。

2016年2月19日 秘密の中庭の偽物の木

研究室がある文学部の棟には、小さな中庭がある。重要文化財、なので触ったりはできひんけど、石櫃と。芝生と木と。風で動く、大きな銀のオブジェがある。わたしはここが好きで、よくお昼ご飯をたべる。園からは散歩に来ていない。

「外で遊びたい」で、よく言うてくれるから、どっか外で、おもしろそうなところないかな、と思て、先生方と、庶務の方にご了承いただいた。みんなとここに来たら、どんなこと思ったり、気になったりするかな。

ついて、石櫃に触ったらあかんとか、いくつか注意事項をお知らせする。みんな、気になるもの探してみよう、と言う。それぞれ、はじめ石櫃に興味しんしん。「なんやろう?」「この書いてあるやつ読んで」。あつというまに、関心が分かれる。石櫃のまわりを調べていたビーチェが、「見て見て、ビーチェ!」と、他の子になにか共有したいとき、日本語で言う。ビーチェ、すごい!アヤノちゃんとスズちゃんは、石櫃の看板を読む。アサカちゃんは、今日はなんとなくわたしと話したりしている。ミカコちゃんが時々そこにやってきて、いっしょにオブジェを見たり、体でオブジェのかたちを真似してみたり。ほかの子達は、探索に飽きて、鬼ごっこを始めた。さて、どうしよう。研究室が囲む中庭やから、騒音の問題もあるし、鬼ごっこは、ここでは一緒にできひん。ピンクさんが「どうするんですか」とわたしに訊く。タイミングをみて、とりあえず鬼ごっこは終えてもらおうと、なんとか声をかけて、集まってもらう。

「何か気になるものあった?」うーん、あるいはうん。「ここでみんなで何したい?うるさくなるやつは、あかんねんけど」鬼ごっこ!「うーん、鬼ごっこは、楽しくなってきたら、どうしても『わー』ってなつてまうからなあ」かくしあそび!「隠し遊び?うん、ほな、それやってみよう」。昔、大学のコミュニケーションデザイン・センターにいてはつた、ハナムラ

チカヒロさんの作品をぼんやり思いだした。森のなかに、偽物のキノコとかを置く、どれが本物で、どれが偽物か、わからなくなる、っていうもの。

「この庭のなかにあるものを、ひろって、どこかに隠そう」。小さな葉っぱ。枝。なんかよく分からんロープの切れ端。等々。それぞれが、何を隠すか考えて拾って、どこに隠すか考える。ともだちといっしょにやったり、一人でやったり。今思えば、もうちょっと、ちゃんと時間で区切ったらよかったな。早く隠し終わった子が、焦れてる。うーん、ほんまに、これも後で、ピンクさんに指摘してもらえたことやけど、こういう時、もっと、一緒にいてくれてはる坂本先生や椎名先生に、声をかけて手伝ってもらったらよかったなあ。早く終わった子が、「もうすこし」の間を楽しく待てる工夫を、いっしょに考えてもらえばよかった。でも、この時のわたしは、視野が狭くて。木登りしてるリミちゃんやシュウジくんのそばにいながら、全員が隠し終わるのをただ待った。

またみんなで一旦集まってもらって、「今から、みんなで、どれが隠したやつかな？って、怪しいやつを探してみよう」ということを言った。でも、こういうばくつとした「みんなで」という言い方では、やっぱりめいめい、散らばってしまった。それを、この時のわたしは、止めなかった。もうちょっと、「ばらばらより、みんなで固まって、話しながら1つずつ歩いて探すほうがきっと楽しいよー」とかなんとか、思っていることをそのまま言うてみるくらい、したってよかったのに。「それは、なんか強制するみたいや」とか勝手に先走ったんやった。こんなん、言うてみて、その反応から考えたらしいやん、って今なら思えるけど、まだ、この時は頭が固かったんやなあ。

怪しむというより、自分で隠したやつを、「これやで！」って言いたくなったり、他の子が隠してるそこお互い見てたから、「これ！」って教えてもうたり。ミカコちゃんとキョウちゃんが一緒に隠した何か、だけが、「まだ見つかってない」「ない」。おお、どれやろ。何人かはすでに飽きている様子。「この葉っぱ？」ああ、確かにこれ怪しい感じする「これ葉っぱ違う色やもん」。でも、「ちがーう」。これ？ちがう。これ？ちがう。ヒントをもらうけど、全然分からへん。もう答え聞こか、というたとき、リミちゃんが「だめ！！」一番はりきってたマサキくんは「えー、もう聞きたい」。どうしようか？とぼんやり投げかけてみたけど、そもそもみんな疲れてる。じゃあ、あと3個だけ探してみ、あかんかったら訊こう、で、結局正解はベンチの下の葉っぱ！ああ、難しかった。とりあえず、一段落。さて、どうしよう。

ピンクさんが、「みんな、一回見つけたものを集めてみましょう」と提案して、それぞれの枝や葉っぱや棒が集まる。「これ、どうする？」に、ミカコちゃんは「むこうの草刈りの大人の人に、これどうしたらいいですかって訊く」おーなるほど、そうやね。ホクトくん、「この棒、ここにあったんだよ、違う木なのに」と元々その棒が刺さってたという木を何度も教えてくれて、まださっきの「偽物、本物、怪しい…」らへんの余韻が残っていたから、「じゃあ、

これを使って、偽物の木作ってみよう」。二つの偽物の木ができた。大阪大学文学部本館の、中庭に行ってみることがあったら、探してみてください。この二つの偽物の木は、まだあるでしょうか？どれでしょうか？



文学部中庭（撮影：桂ノ口）

まちかね保育園のてつがくワークから考える、こどものてつがくについて

3月14日の最終回、「いやだったこと、おもしろかったこと、なんでもいいから、覚えていることがあったら教えてください」と感想を聞いた。あまり手や声があがらなかったのも、ぐるっと一周聴いていくと、マサキくん、アヤノちゃん、スズちゃんが、「ひとの話をきくのがいやだった」と言った。「なんでいやなんかな？」「どういうところがいややった？」には、きゅっと口を結んだ。はじめ、感想は「とくにない」と言っていたミカコちゃんは、それを聞きながら、「ああやっぱり思いだした」と言って、「やったことを、ほかのひとがどうおもっているのかとかは、きかないとわからないから、そういうのがわかるのがおもしろかった」と言った。

わたしは、感覚としては、ミカコちゃんの言っていることがわかり、マサキくん達の言ってくれた「いや」さが、わからない。坂本先生、中島先生とのふりかえりで、「ひとの話をきくのがいやだ」ということは、どういうことだと思われるかを伺った。個性ももちろんあるけれども、やはり年齢によって、集中力が切れやすいということがあること。そして、自分が話したいことがあるのに、順番を待たないといけなかったりして、残念になってしまうということ、をお話いただいて、なるほどなあ、と思う。

いま、今学期のワークを終えて、「大切にしてみることのできる、わからなさ」には、大き

く分けて、3つがあるように整理された。

1つは、自身について。「訊かれるまでわかっていなかった自分」というものは、どの人にも必ずある。訊かれたことへ応えようと考えてみるその場面、自分自身は「わからない」もの、わかってみようとしているものとして存在している。じっと考えてくれているとき、私たちのうちには、まだ「わからない」自分、考えてみることによってしか「わからない」自分がある。たとえば「待つ」というしかたで、誰かが自分のわからなさに向き合っている時間を、いっしょに大切にすることができる。これは、年齢があがっていても、そのまま継続してゆける1つの重要な態度であると思うけれど、そもそも「待つ」という行為自体を捉え直す必要性に気づいた。ホクトくんが「雪の結晶ならば、つながっているからおもしろい」と言ったように、待っているその時間にも、各自とその待っている時間との「つながり」が見えるような工夫が、大切なんだ。

わたしは今期、「待つ」ということと「静かにする」ことを一旦切り離して考えてみる余裕が持てていなかった。単純なことだけれど、挙手制ではなくコミュニティボールを一周する場合、「すぐに思いつかなかったらパスしてもいい。パスしても、あとでもう一度あなたにボールを渡すよ」ということをいつも明確にする。静かに待っていればいるほど緊張する場合もあるだろうし、誰かの意見を聞くほどに思いつく場合もあるだろう。そして、たんなる情報として「パスしてもいい」と伝えるのではなくて、同時に「今もうすこし考えてみるのと、一回パスするのとどっちがいい？」と、考えるためのアシストを続けること。「こどもの哲学」では、たとえばそういうことが必要だったんだ、と思う。

挙手だった場合も同じで、たとえばフユちゃんは、手を元気よく挙げるけれども、当てるとじっと黙り込んでしまう、という場面が何度かあった。彼女の場合は「しずかにしてくれないとかんがえられない」と表明もしてくれたので、周りの子に対しては「じゃあしずかに待とう」と促した。でも、この時も、単に言ってくれたことをそのまま叶えるのではなく、他の子も含めて考える場面にするこも、できたのではないかと今になって思う。声かけ1つを、たとえば「もしかしたら、確かに一回静かにしてみると、みんなも新しくなにか考えつくかもしれないね。20秒、しゃべらないでいてみよう。20秒たったら言うから、しずかーにしてみたら、どんなことを思いついたか、教えてね」とすれば、ただフユちゃんを待つだけじゃなく、フユちゃんと同じように静かにしてみたらどうなるか「分からない」自分にも、同時に会えたかもしれない。

「待つ」ことそのものとのつながりを訓練するのではなくて、「待っているその中味」とつながることにアンテナをはって、工夫する。これは、低年齢の彼らとのワークのおかげで、よくわかった点だけれども、大人が参加者である哲学カフェであっても、原則にしている態度だだと思う。年齢があがるにつれて、黙って時間をやりすごすことはどんどん可能になるけれども、

「せっかく一緒に人と考えられる場にいる」ということを、もっと、大切にできるはずだ。フランスの哲学実践家のオスカル・ブルニフィエは、彼の哲学実践セミナーでよく「禅のセミナーに来てるんじゃないんだから！」と笑った。その通りで、自分自身への「わからなさ」であっても、だからといってそれを自分だけにしか触れないようなものにしては、「てつがく」である意味がない。たった20秒でも、一緒に考えられる時間であるということを尊重することが、こどもの哲学、人と一緒にするてつがくの醍醐味だし、進行する際に注意をはらうべきところなのだと思う。

2つめの「わからなさ」は、一緒にいる人について。共通して訊かれることによって、自分が考えたこと、思ったこととは別に、一緒にいるメンバーは何を感じ、考えたのかが「わからない」ものとして存在することがある。ミカコちゃんが言ってくれたのは、このような「わからなさ」のおもしろさだったろうと思う。

高校や大学の、とくに授業で行う p4c の時間は、大抵の場合、一度行ってから次回までに一週間以上、間があく。その「間」に行っていることは個々人さまざまだし、同じクラスであっても、親しい個人同士のつながりを除いては、互いにその「さまざま」のなかみを知ることはふつうない。この臨床哲学研究室に入って関わってきた p4c では「Safe Community of Inquiry (探究)」というものを大切にす。 「このクラス、この授業、この学校・園」という、人と一緒にいる時間についての「こんなふうになったらいいな」「こんなやつたら楽しいやろうな」を、遠い理想像として求めていくのではなくて、もっと手の届きそうな、自分で関わるところに見いだししていく、探究のありかた。そのために、本当の「これはしんどい」「これはいやや」がお互いに出しあえ、受け止めあえるような探究のありかた。けれど、高校や大学の場合に「Community」というのは、極端に言えば「Inquiry」を行っているその場でその時に生じ、感じられ、終わりと同時にほどけるような、「どちらかというと刹那的」なものであるとわたしは思う。(もちろん、これは極端に図式化しただけだから、実際にはくり返すことで、積み重なってゆくものがあるし、ふだんから生成されている「Community」に影響をもたらすこともあるだろう。)

このような「どちらかというと刹那的」な「Community」においては、一緒にいるその成員は「わからない」だらけで、ふだんは気にしていないその「わからなさ」に直接出会う p4c の時間、聴くなかで知りわかる何かのかけらは、そのまま、初めて触れる、誰かのかけらのように感じられる。けれども、保育園で過ごす子ども達は、お互いが、「わからないだらけ」ではない。大人に近づくにつれて、喜怒哀楽は基本的にそーんなには開けっぴろげにしないものになってゆくけれども、まだ低年齢の子ども達は見つけたおもしろいことやいやなことや、本当に様々なことを、すぐ、その場にいるひとたちに開いてくれることが多い。それに、ただ幼いというだけではきつくない。保育園は、幼稚園ともまた違って、暮らしの場でもある。毎日朝

から晩まで、いっしょに遊び、学び、ごはんを食べ、昼寝をして、暮らしている。ふつうの意味での家族、ではない。必ずしもなかのいい友だち、ばかりでもきつとない。でも、毎日、いっしょに暮らしている保育園の子ども達は、お互いがお互いを、ある仕方でも、わかっていて。前述のミカコちゃんが、転園してきた子だったということは、もしかすると人の話をきいておもしろいと思ったことにすこし関係するかもしれない。

保育園のような、全然、「わからないだらけ」ではない場所での p4c は、「わかっていなかったものが、わかっていなかったとはっきりわかる」のではなく、「わかっているとおもっていたものがわからなくなった」り、「わかっているとおもっていたものがわかっていなかったとわかる」、自分のなかにひとひねりの動きがある。ただ「まだ知らない」ような「情報」を聞き出す、のではなくて。

たとえば、もっと「推理（推論）」してみる時間を多くとってみればよかった。理由を尋ねられても、自分では答えられない場面はたくさんあった。そのようなときに、すぐに他の子達に「なんか考えてみよう」と開いたら、「わからない」として出会い直せる場にも、もっとなっていけるかもしれない。やっぱりこれも、彼らとの中で学んだ、大切なことの1つだと思う。もっと大人の場合なら、自分のことは、いつも自分がいちばんわかるわけではないのだし、自分で理由を応えられたとしても、「今のは、本当に理由になっていると思いますか？」みたいに、いろいろなものを楽しんで疑う探偵みたいに、もっと他の人たちも巻き込んで推理（推論）をする場面があると、いいかもしれない。

3つめは、今考えている、ものごとについて。これは、「Inquiry 探究」に、もっとも直接的に関わるころ。ワークのなかでは、「たいくつ」について尋ね、聴いたとき、「たいくつ」は「わからない」ものだった。これは、今この時に「わからない」があるとき、「わからないだけだ」と卑屈になるかけらを手放すだけでいいので、いちばん簡単なように思う。わかっている人がいれば、話してもらい、わかっていない人とは、どこがわからないか、わかりたいかを話し合うことができる。

今回の実践から言えるもっとも重要なことのひとつは、こんなふうに挙げた「わからない」たちの「ありかた」だ。「わからない」は、20分なら20分、2時間なら2時間のあいだに、いつどこに現れるかなんて予測できない、流れ星のように、ある。見つけた時、「消えないうちにお願ごとをする」ように、その瞬間にすぐに「反応する」がなければ、「こどもの哲学」は、人と一緒にする哲学、は、なりたない。「反応する」は、仕方ひとつで、同じ空を見る仲間を楽しませることもでき、うんざりさせることもある。勉強になることもあるし、あそびになることもあるし、ただの時間食い虫になってしまうこともある。魔法のように、星がたくさんふってくる時間になることだって、ある。

できること、あるいは必要なことは、空には流れ星があると知っていること、信じていること。

空を見るのにきもちがいい場所、を探したり、工夫したり、大切にすること。流れ星のひとつひとつはかけがえがないけれど、だからといって逃したとき、「頭の中の星」をいつまでも想って、空を見ることを放棄したりしないこと。何度でも、流れ星を楽しむ、いきた心でいること。何度でも、一緒に空を見ようって呼びかける、いきた心でいること。疲れたときの、ひとやすみ。

「こどもの哲学」は、「あり方」。この身ひとつで、できること。流れ星を楽しみに、いっしょに空をみるように、「『わからない』を楽しみに、いっしょにここにいる」。たいしたことじゃないのに難しいこの二つ、の、どちらが欠けてもなりたたないけれど、反対に、そのどちらもがそこにあるとき、していることはなんだって、それが「こどもの哲学」なのだと、今のわたしは思います。そしてそれが、大好きです。



桂ノ口